

# 於大の方由緒の地 椎の木屋敷跡



刈谷城の絵図をみると、刈谷城の北東に「椎の木屋敷」と記されています。少し高台になっており、その一帯を椎の木屋敷といいます。

この椎の木屋敷は、徳川家康の生母である於大が、岡崎の松平広忠に離縁されて刈谷に戻された際、一時住んだといわれます。江戸時代では一般には出入りが禁止されており、人夫がとどきき清掃を行いました。中央は窪地で、まわりが高く、椎の木が多く茂っています。五輪の塔が数基あり、傍らに地藏尊が立っていたといわれています。

(平成九年三月十三日 市指定史跡)

所在地 刈谷市銀座六丁目  
問い合わせ先 刈谷市教育委員会文化振興課  
TEL 05660・621037



元康がいるだろうし、迎え討つ織田軍の先頭は於大の兄信元や夫俊勝が引き受けることになると考えたからです。それを考えると心配で夜も眠れませんでした。せめて夫や兄がわが子元康と直接戦うことだけは避けたいとたひたすら願うばかりでした。このような中で元康は阿久比にいた母於大のところを訪れました。時の過ぎるのも忘れて語り明かしました。於大は我が子の無事を祈り再会を約束して別れました。

於大の母於富は永禄三年(一五六〇)に亡くなりましたが、於大は母の死をいたみ、華陽院の法名をおくられた母の位牌を楞嚴寺に納めました。

天正十五年(一五八七)三月、久松俊勝は岡崎城で亡くなり、清田(蒲郡市)の安楽寺に葬られました。翌年於大は夫の眠る安楽寺で授戒を受け、伝通院と号しました。その後文禄三年(一五九四)には絵師を呼んで、自分と母華陽院の肖像画を描かせ、これを一對として楞嚴寺に納めました。また、



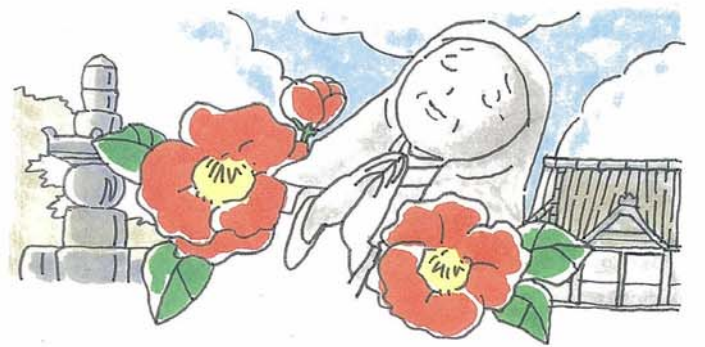
岡崎から持ち帰っていた天目茶台・茶碗・白磁香炉・屏風なども寺に納めたと言われています。これらの画像や調度品は現在も楞嚴寺に保存されています。

また、於大は朱墨に自分の血を少し混ぜて阿弥陀經を書きました。元康をはじめとする子供たちの成長と世の安定、平和を祈ってひたすら念願して書いたことでしょうか。

於大は慶長七年(一六〇二)に京のぼりました。伏見城で病にかかり、八月十九日に亡くなりました。七十五歳でした。

家康は生母の死を悼み、京都の智恩院で葬儀を行い、法会を営んで、遺骸を江戶に送ってから火葬し、智光寺・光岳寺を建てました。

このように戦国の世の中で、政略結婚の犠牲となつて悲運な境遇にあつた於大ではありませんが、その聡明さと英知、それに愛情あふれる母性愛や信仰心はとても際立っていました。



於大の肖像画・絹本着色伝通院画像  
この肖像画は愛知県文化財に指定されており、於大の姿を最もよく伝えているといわれています。

参考文献 『徳川家康生母傳通院殿於大の方』

— 戦国の世を生き抜いた  
家康の生母於大の一生 —

この物語は戦国時代という争いの時代の中に生きた女性のお話です。

その名を於大といいます。江戸幕府を開いた徳川家康の生母としてよく知られています。

於大は、武士同士の争いが激しかった戦国の時代に生まれ育ちました。武士たちはあつちについていたり、こつちについていたりして自分の権力を伸ばそうとしていました。そのため、勢力争いの中で、政略的に結婚したり離縁されたり、悲運な生涯を終えた女性は少なくありません。於大もその一人で、戦国の女性ともいわれます。

このように、尾張の織田氏、駿河の今川氏の



不安な毎日を送っていました。

水野氏は、十四代目の貞守の時に一時没落した家運を復興し、祖先発祥の地である緒川（東浦町）の砦を修築し、しだいに勢力を伸ばして、西三河の刈谷・熊、知多の大高・常滑などの諸氏を従えるようになりまし。やがて文明八年（一四七六）に刈谷に城を築きました。この城は現在の元刈谷にあたります。

貞守の子孫にあたる忠政は、知多郡緒川城と刈谷城の両城をもつ城主となっていました。忠政は一人目の妻として、於富と結婚しました。於富は大変思慮深く美人であったといわれます。

於大は於富の二番目の子として生まれました。享禄元年（一五二八）のことです。

於富は、於大を生んだあと、近信・忠分、忠重を生み、養父の大河内元綱のもとへ帰っていましたが、のち岡崎城主松平清康のもとへ嫁いでいきました。

このころ岡崎の松平氏は、尾張の織田氏と駿河の今川氏の間にはさまって両者からおびやかされていました。松平広忠は今川氏の家来となっていました。が、天文九年（一五四〇）織田氏が安祥城（安城市）を奪いとつたため、松平氏はこの際に織田方である水野氏と仲良くするのがよいと考え、翌年水野忠政の娘である於大を広忠の妻にしました。この時於大は十四歳、広忠は十六歳でした。

於大は天文十一年十二月、岡崎城内で男の子を出産しました。その子の名前は竹千代といい、後に徳川家康となります。於大は妙心寺（岡崎市）に薬師如来の像を納め、わが子の成長を祈りました。

この年、織田氏は今川義元の大軍を打ち破りましたが、翌年於大の父忠政が病死しました。忠政のあとを継いだ信元は、昇り調子の織田氏を敵に回して

の者はもう戻り、今頃は岡崎に着いていることでしょう。追いかけても間に合いません。」と言いました。信元の家来は仕方なく、於大のお輿を守って刈谷に帰りました。

この時、於大はまだ十七歳でした。この歳で人の考えを見抜き、先を読んだ於大の深い心づかいは、人の心を一層深くうち、於大はすぐれた人であると、後々まで言い伝えられるようになりました。

於大はこのようにして三歳になった竹千代を岡崎に残して刈谷に帰されました。

於大は同じように離縁されて刈谷に帰ってきた姉といっしょに椎の木屋敷に住んだといわれています。椎の木屋敷は刈谷城から少し離れた高台で、椎の木が茂った閑静な地です。於大はここでわが子・竹千代のことをはじめとして、母於富、別れた夫広忠のことなどを思いおこしてのことでしょう。

於大は刈谷に来てから水野氏の菩提寺である楞嚴寺（刈谷市天王町）や、緒川の乾坤院（東浦町）に



まで、落ち気味の松平氏と手を結ぶことは不利であると考え、松平氏と手を切ることに決めました。しかし、岡崎の広忠は、古くから親しい仲にある今川氏から離れることはできませんでした。そして、自分の妻の実家（水野家）が織田側であることで、今川氏から圧力を受けることを恐れて、涙をのんで於大を離れました。於大はこのころ病に伏していましたが、天文十三年に、病気が直るのを待って、実家である刈谷の水野家に帰ることになりました。

出発の日、岡崎方の二十人程のお供によって、於大はお輿にのり、刈谷へ送り届けられることになりました。一行が刈谷の境になる十八丁（場所不明）にさしかかったところ、於大は送りの人々に「くろさまでした。あなたたちは、ここから帰ってください。」といいました。さらに、「私の兄の信元は、気の短い人ですから、夫の家から出されて帰って行く私を、あなたたちが送ってきたと聞いたら、きつと腹を立ててしまうことでしょう。あなたたちをみ

たびたびお参りをしました。楞嚴寺では和尚の法話に熱心に耳を傾けていたようです。

於大は兄信元のすすめによって尾張国阿久比（阿久比町）の城主久松俊勝に再び嫁ぎました。於大はここで夫に尽くし、三人の子を生みました。駿府（静岡市）にいた竹千代も吉しみの中にも無事に成長をとげていました。竹千代は十五歳の年、今川義元のもとで元服の式を挙げました。この時竹千代は名前を二郎三郎元信と改めました。また弘治三年（一八歳）には、蔵人元康と改めました。翌年、元康は三河に出陣して、織田方の広瀬・幸母・伊保（いずれも豊田市）などの城を攻め、石ヶ瀬（大府市）では伯父にあたる水野信元の軍と戦いました。そのち永禄三年（一五六〇）今川義元は西上を決定しました。於大は西進してくる今川軍に恐れをなしていました。なぜなら、今川軍の先頭にはわが子



な斬り殺してしまうが、殺さないまでも髪を剃って坊主頭にして城を追い返すに決まっています。私が離縁となって刈谷に返されたにしても、竹千代を岡崎に残してきたのですから、岡崎のことを忘れようと思っても忘れることはできません。そのうえ私の兄と竹千代とは伯父、甥の仲であるから、きつと仲直りする時もあります。いまあなたたちが殺されたら、松平の方ではいつまでも心にしりりが残り、仲直りのさまたけとなりましょう。このまま帰ってください。」と言い、刈谷まで送り届けたというお供の申し出を断りました。

仕方がないので、お供たちは少し離れたところへ隠れて様子をつかっていました。

すると、於大の言葉どおり、信元の家来が二十三人出迎えて来て、岡崎からの見送りの者はみんな斬り捨てろと命令をうけてきました。於大はお輿の中から静かに、「くろさまでした。岡崎